



シカゴ研究滞在記

東京理科大学 教養教育研究院
葛飾キャンパス教養部 准教授

り かい えん
李 海燕

2023 年春から 1 年弱、大学の在外研究員制度を利用してシカゴに滞在し、イリノイ州の州立大学で研究生活を送りました。実は学内外の諸手続きを経て、当初は、2020 年 3 月にはアメリカの交流訪問者ビザ取得のためのインタビューを受けることになっていました。しかし、翌月にアメリカ国務省からすべての国際交流プログラム中止の指示が出され、そのまま長い間渡航は延期となり、訪問する予定の大学も変更せざるを得ませんでした。新型コロナは、長期的な視点で見ると歴史上の一つの出来事であると同時に、わたしたち個人と社会には甚大な影響を与えたといえるでしょう。

■人文研究 (Humanities) とデジタル革命

私の専門は東アジア近現代史で、研究は一人で行う場合がほとんどです。例えば、今書いている論文は、東アジアにおける最後の大型国際紛争であった朝鮮戦争における、中国東北地区（旧満州）出身の朝鮮人部隊についてです。北朝鮮の先鋒部隊の半分弱を占めていたこの部隊は、朝鮮戦争の開戦および初期の戦局において、非常に重要な役割を果たしています。彼らがなぜ、戦争勃発直前に朝鮮半島 38 度線の最前線にいたのかという研究課題を解明するために、部隊が移動

した背後に存在する国際的な冷戦構造、中国の地域社会の状況や軍人たちの心理的な側面などについて、分析を行っています。

このような考察を行うために、より具体的には、関連する文献史料の収集、解読（史料批判を含めて）などの作業に取り組んでいます。社会科学全般に大きな影響を与えたマックス・ウェーバーの言葉を借りれば、「学問に生きるものは、ひとり自己の専門に閉じこもることによってのみ、自分はここに後々まで残るような仕事を達成したという、おそらく生涯に二度とは味わえぬであろうような深い喜びを感じる」のです（マックス・ウェーバー著・尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波文庫、2007 年、22 頁）。

その一方で、筆者は歴史研究も、近年急激な進捗を遂げているデジタル革命と



研究室までの歩道は自然豊かで、リスとシカをよく見かけました。

無縁ではなく、環境の変化に適応していく必要があると考えてきました。そこで、デジタル革命の発祥地であるアメリカで学びたいと考えました。

秋に The Social Science History Association (SSHA) という学会の年次大会に参加しましたが、会議での議論の進め方や研究の中身自体は、それほど日本と変わらないように感じました。しかし、243 個というパネルの多さには圧倒され、なかにはあまり聞いたことのない Measurement Issues in Historical Data というパネルもありました。とくに、「Whova」というアプリを利用して、大会の情報が迅速且つ、大量に発信されていたことが印象的でした。ちなみに、近くの市民図書館でも、無料のデジタル・リソースが大量に提供されていて、例えば、Ancestry Library (ご先祖様やファミリーについて調べられる) などが人気を得ていると聞きました。

とくに、2010 年代後半から急激な進化を見せている AI 翻訳技術(機械翻訳)により、言語の壁が一段と低くなったことを実感するとともに、それにより、研究の内容・中身がさらに問われることになるのではないかと考えました。東アジア近現代史研究は、日本が強みを持っている分野ではあるものの、その成果は英語の世界では十分知られていないといえます。最近日本の大学で進められているオープン・アクセスにより、欧米圏の同業者も日本語による研究を無視できなくなるのではないかと期待しています。ちなみに、拙著(『戦後の満州と朝鮮人社会—越境、周縁、アイデンティティ』御茶の水書房、2009 年、225 頁)が、イギリスの大学図書館に入っていることを知人に教えてもらって、驚きました。

もしかすると、現在壮大なスケールで東西の知の接続が行われようとしていて、将来的には世界レベルでの人文・社会科学の知の統合が実現されるかもしれません。こうした知識・情報の交流だけでなく、アメリカの大学院で学位を取得した研究者が日本で研究職を得るなどの人材移動も増えると予想されます。

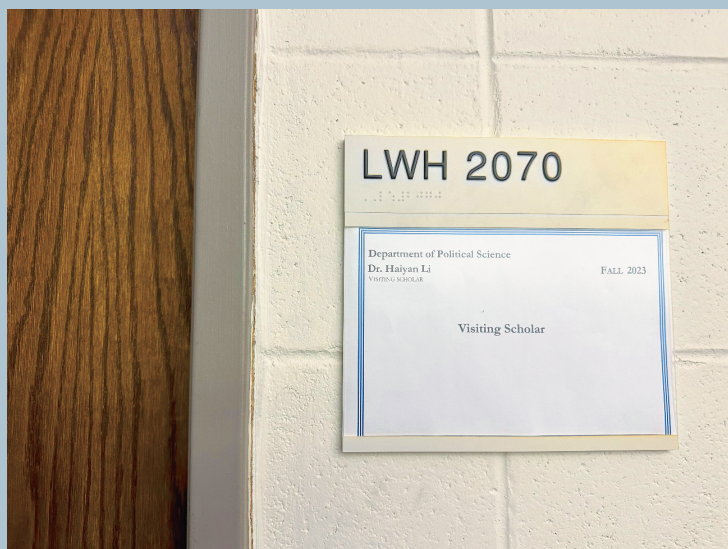
ちなみに、アメリカのデジタル・インフラは、消費者目線で設計されていて、日常生活においてよく機能しています。例えば、タクシーやフライト、銀行の利用などは、スマートフォンのアプリでサクサク進み、外国人でも利用しやすい仕組みになっています。

■筆者がみたアメリカ社会と DEI

昨今日本でも進められている DEI (ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン) についてですが、本場のアメリカで受けたカルチャーショックは大きかったです。まず、アメリカ人は親しい人でなくても、一般的にファーストネームで呼び合っています。オランダ出身の教授によれば、リスペクトがあれば、自分の親をファーストネームで呼んでも失礼ではないそうです。筆者は、日本に留学したばかりのときに、日本人の「ファミリーネーム+さん」という呼び方に大変感動しました。中国では「劉課長、王部長」など、職位で呼ぶのが一般的であったためです。このファーストネームでの呼称は、DEI の文化的基盤となっているように思います。これにより、一人ひとりの違いを互いに受け入れ尊重しあい、人間関係も相対的にフラットになるのではないのでしょうか。

また、アメリカの大学には、中東地域出身者や、ヒスパニック系、ユダヤ人など、多様な人種や宗教のバックグラウンドを持つ人々が通っています。それだけでなく、違う人生ステージ(年齢)にいる学生がみられ、子どものいる女性も珍しくないようです。「セカンドチャンス」をつかもうとする学生のために、夜間に開講する授業も珍しくないと聞きました。

そして、LGBTQ (性的少数者) に対する理解が、ムーブメントの本場であるアメリカではだいぶ進んでいるように見えました。大学教員のなかにも、同性カップルがごく自然に働いており、彼ら・彼女たちは 20、30 年にわたってパートナー関係を続けてきたそうです。また、ある教授は大学生の娘に同性パートナーができ



有難いことに、個人研究室が用意されました。

たことを大変喜んで、周りの人に報告していました。アメリカには人工妊娠中絶を禁止する州も多いことを考えると、アメリカ人の価値観の幅の広さに驚きます。

最後に、これもニュースでよく見かけますが、移民・難民問題が非常に身近にありました。ウクライナの戦争難民である数百人の高校生をノース・サイド（白人地域）にある公立高校が受け入れることになり、英語教員を増やすための予算が政府から配分されました。地域の教員と保護者は、彼らのための寄付やボランティア活動を行っていて、アメリカのチャリティやシェアの文化が健在であると感じました。その一方で、テキサス州が大都市部に送り込んだ中南米出身の人々は、地元のホール・フーズ（スーパーマーケット）の前で幼い子供たちを連れて物乞いをしており、住民たちは複雑な思いをしていました。

■ ノース・サイドとサウス・サイド

アメリカには過去に数回訪れたことがあり、個人的には豊かな自然と人々の大らかさが好きです。今回滞在したシカゴはミッドウェストに位置し、東海岸や西海岸とは異なる落ち着きと堅実さがあると感じました。本稿執筆中の今現在、ちょうど民主党全国大会が行われており、ニュースで映し出されるユナイテッド・センターがとても懐かしく感じられます。ユナイテッ

ド・センターといえば、マイケル・ジョーダンが在籍していたシカゴ・ブルズの黄金期を象徴する施設であり、バスケットボールのファンは必ず訪れたがる場所です。また、「理科大生に」という面では、シカゴ科学産業博物館がお勧めです。ここには、ライト兄弟の飛行機、ドイツの潜水艦、NASAのアポロ計画で使われた宇宙船などが展示されています。

ところで、ニュースでよく報道されるシカゴの銃撃事件は、日本にはないリスクだといえます。シカゴの居住地域は、基本的にノース・サイドとサウス・サイドに分かれていて、大まかにノースは白人が、サウスはアフリカ系アメリカ人が住んでいます。子供が同行したため、なによりも安全な「場所」を選んで、居住環境のよいとされるノース・サイドに滞在しました。にもかかわらず、子供が利用していた体育館の横で、銃撃事件があったという連絡が入って、冷や汗をかけたことがあります。

緑豊かなノース・サイドには、地下室付きの豪邸が立ち並んでいて、住人たちが大型犬を連れて散歩する姿をよく見かけました。アメリカ人にとって、車と犬は必需品だといえるかもしれません。私が心配していたアジア人へのヘイト行為はなかったし、会った住人たちはいつも礼儀正しかったです。子供が地元の公立小学校（8年生までである）にお世話になり、教員と生徒たちに大変親切にしてもらいました。お別れの際には、

クラス全員からのお手紙が入っているGoogle slideを送ってもらいましたが、なかには気をつけて日本語の訳文を入れてくれた生徒もいました。

子供のバスケットボール・ゲームのために、サウス・サイドにいく機会もありました。この地域は、歴史的なアフリカ系アメリカ人の大移動が行われた、20



サンクス・ギビング（感謝祭）は、家族が集まる大切な休日です。近隣の個性的なサンクス・ギビングの飾り。



食料品をシェアするためのフリーパントリーは、市民図書館や大学でよく見かけました。

世紀初頭の 30 年間を中心に形成された経緯があります。生活者の感覚としては、緑とスーパーマーケットがあまりないことが特徴としてあげられます。興味深いのは、ノース・サイドの子供たちは黒人音楽であるラップに夢中で、ラップをつくる授業があるほどでした。ちなみに、筆者も子供の影響を受けて 2Pac (25 歳でなくなったヒップホップ界の唯一無二の存在) を聞くことがあります。

■食と食文化について

アメリカの「食」はあまり評判がよくないですが、それ以上に、東京のように食べ物が手軽に手に入らない問題があります。ほとんどのスーパーマーケットは大型で、車で移動する必要があります。理科大葛飾キャンパスの学食の「有り難さ」を感じずにはいられませんでした。

ところが、アメリカ料理はハンバーガーやステーキだけではなく、食材はきわめて多様、且つ豊富であるという側面もあります。移民社会であるために、世界中から食材が運ばれるのです。滞在期間中の冬には、トレーダー・ジョーズというスーパーマーケットが開発した冷凍 KIMBAP (韓国の海苔巻き) が、ローカルニュースになるほど人気を得ていました。ギリシャからの移民が創業した地元のスーパーマーケット Fresh Farms では、みたことのない様々な食材を目にすることができました。韓国の会社が運営する H マートは、韓国食品以外にも、中国、東南アジアや日本の食材を置いていました。このように、食の選択肢はたくさんありますが、ほとんどの人は行き慣れているスーパーを利用します。

ところで、クオリティーの高さで知られる東京の外

食、世界三大料理の一つとして知られる中華料理や近年人気を得ている韓国料理など、私たち東アジアの「食」のレベルの高さは自慢できる点であると思います。この高品質な食生活は、現状、主婦や料理人を中心に支えられていると言えるでしょう。

一方で、アメリカ人が楽しむのは「食」そのものより、食事を通じてのコミュニケーションであるように感じました。彼らは、よく家に人を呼んで、食事会 (ホームパーティ) をします。手料理もあるけれど、ケータリングをよく利用します。滞在期間中、春はエバンストンにあるロヨラ大学の先生、秋はダウントウンにあるノースウェスタン大学の先生 (大学院生たちもたくさんきました)、感謝祭はノースサイドにあるイリノイ州立大学の先生方から都度ご自宅に招待していただき、深い交流ができました。日本に詳しい教授によれば、日本人研究者と一緒に食事をしたことはたくさんあるが、自宅には呼ばれていないそうです。

■おわりに

新型コロナ期間中にシカゴの物価は倍に値上がり、歴史的な円安が進んだため、現実的には経済的な負担が生まれました。しかし、研究者やローカルの住人たちと直に交流することができたことで、アメリカ文化を肌で感じることができました。数回しか会ったことのないニコール (子供の友達の親) とハグをして別れた時は、心温まりました。

シカゴでの滞在は、筆者にとって、地球の反対側から自分自身 (研究を含めて) を見つめなおす契機になったように思います。視野を広げる貴重な機会を与えてくれた、東京理科大学と葛飾キャンパス教養部の同僚たちに感謝を申し上げます。



噛み応えのあるシカゴピザがお勧めです。



アメリカのスーパーマーケットでよく見かけられる、ヘルシーなフムス (中近東の豆ペースト)。

